

女装家/成人映画観客・戸野この子氏インタビュー

(聞き手：加藤りょう・石川寛之)

加藤：私たちは上映会に参加してくださった皆さまに、アンケートへのご協力をお願いしていました。とくに戸野からは非常に充実した内容のご回答をいただき、今回はそれも踏まえて成人映画との出会いや映画経験についてより詳しくお話を伺えたらと思い、インタビューをご依頼させていただきました。よろしくお願いいたします。

戸野：ははは、そうですね。よろしくお願いいたします。

加藤：はじめに、成人映画館に通うようになったきっかけをお聞かせください。

戸野：そんなに頻繁に通っていたわけではないんですよ。だけど、いちばん最初に行ったのは18で、田舎から大阪に出てきて、やっぱりね、特に男の子だとちょっと悪いところ行きたいじゃないですか。それが最初ですね。ですけど、その1回目のときにすごいショックを受けた事件があったので、それからしばらくは行ってないですね。

ほんま1、2年前にまた行きだしたんですよ。18のときの件は、もう隣にゲイのおじさんが座ってきて、その後はちょっとすいません、自主規制ということにさせてもらいます。

加藤：その件があったにもかかわらず、どんなきっかけで再び通うようになったのですか。

戸野：18の時は普通だったんですよ。その後人生いろいろありまして、こう〔女装家に〕なってしまって。はっきりと看板はあげてないんだけど、女装バーがあるんですよ。店主がオッケーいいよと、私はあなたたちを気持ち悪いとは思わないからどんどん来てねと、そしたら自然と同じような人が少しずつ集まってきて。そして隣の人と喋ってたら、映画館行ったら何かあるよという話があったんです(笑)。それで行ってみたら、言うたら、女性として見られる。嘘でしようと思ったんですけど、自分がどれだけお化粧とか服装とかできているのかという実験にもなるし、18のとき以来全然行ってなかったからたまにそういうのもいいんじゃないかって思いました。

加藤：女装姿で成人映画館に行ったときにどういう反応されることが多いですか。

戸野：それは映画館によります。普通の成人映画館だと、おじさんが隣に来たりとか、あるいは1個開けて〔席を〕取られたりとか後ろに来たりとかして、その後は自主規制(笑)。

加藤：自主規制っておっしゃいますけど言っちゃっても大丈夫です。

戸野：大丈夫ですかね、〔石川の方を向き〕止めてね、一応女性なのでね(笑)。軽いのかと言えば、何か知らんけれども見て欲しいっていうおじさんがいるみたいで、大体なぜか1個あけて座るんですよ、触るか触らないを痴漢の一線とするならば、私は僕は違うっていうのをアピールしてるのかなと、私は勝手に解釈してるんですけど。でも嫌なふりしつつもちゃんと見る方がいいのかなと思ってます。目の前で上映されている映画は、やっぱりプロの人が撮ってるので、卓上に蛍光灯が置いてあったり柱があったり、意味なく扇子が立ててあったりして、〔陰部が〕隠れてるんですよ。これは太田さんや浜野さんも力説してたんですけど、フィルムで撮ってるからモザイクかけられないんです。映画では見えないようにしてるけど、見えない方がこっちにあるわけですよ。

加藤：本物が(笑)。

戸野：だからそういう意味ではサービスかなと思ってて。今、アクション映画で普通のシネコンの椅子が揺れたりとか、爆風が飛んでくるやつありますよね。ピンク映画館でエッチのシーンになったとき、特別料金払わなくてもリアルが横にあるんですね(笑)。

加藤：もっとすごい人もいたのかもしれないですけど、露出狂のような人を見てあげたら、相手の男性はどういう反応をしますか。

戸野：何か頑張ってくれます。ただ私のポリシーとしては、基本的にやっぱり映画観たいんですよ。さっきのシネコンの爆風じゃないですけど、その〔セックス〕シーンになったときにプラスアルファであるもんであって、ストーリーモードに入ったとき私は知らないよと。やっぱり「紳士」な人、それが紳士なのかはわからないけど、そのシーンになったときに、体を寄せてきてってムニムニユっていうのはあって

も、普通にストーリーが進む時は、何もしないっていう。そういう人が極まれにいます。ほとんどの人は関係ないですけど、あれは映画を観てないでしょ。監督さんとかは、〔映画を〕真剣に作ってる。それちゃんと観ようよとは思いますが。

加藤：戸野さんとしてはやっぱりちゃんと映画を観たいっていうことですが、成人映画館に通うようになったきっかけが、女装バーで成人映画館に行くと面白いことあるよって言われたということで、最初はやっぱりハプニングというか、映画外の観客同士の関係のようなものを求めて行ったのですか。

戸野：もう私、最終的にはバーのママに騙されました。あのね、いろんな人いるんですよ。見せる人もいれば痴漢目的の人もあるし。なかには本当にやばいのもあるんですよ。もうなんか3、4人グルになって〔強姦する人もいる〕。本町館でそれは絶対にはないです。危険な映画館がたくさんあるなかで、「ここや、私のいるところは」と思ったのが本町館です。

加藤：やっぱりそういうことをしている人たちは、映画の内容は全然関係なく場所が大事なのですかね。

戸野：関係ないと思いますね、はい。普通の人が近寄らないところで、性的マイノリティの人が行ける場所というのは限られていて、なんか知らんけど集まってきたという。結局、元々映画館って儲かるビジネスでしたよね。ところがテレビが出てきて、一気にお客さん減っちゃいました。本町館もたぶん経営としてはすごく正しいんですよ。普通の映画だとテレビにお客さん取られちゃうからエッチ映画にしましょうと、それで何とか生き延びたって感があったんですけど、今度ビデオデッキ出ちゃって、最後はストリーミング映像が出てきてた。その段階でやっぱり普通の人には成人映画館来ないじゃないですか。家にビデオデッキもあれば、Netflixも何でもあるのにわざわざあそこへ古い映画を観に来る人はいないと考えたとき、プラスアルファのそれなんでしょうね。

加藤：そうですね。その意味で戸野さんにとって今の成人映画館の魅力とはなんだと思いますか。

戸野：まずやっぱり他の人が周りにいるっていうことですね。家でひとりで成人映画を観ていても普通にドキドキしますが、映画館だったら、私いろんな人から見られてるところでこんなエッチな映画を観ているっていう……。恥ずかしいんですけど、な

んかドキドキする。ちょっと怖さもあったりします。別にスカートの中に手を入れるぐらいだったらされてもいいんですけど、もう全部脱がされたりとか、服を汚されるとかは勘弁してもらいたいですけどね。人の交流って綺麗事と言われればそうなんですけど、家でひとりでそれを観てるのと、周りにおじさんが座っていて、画面で何かやってるってなったら、なんかドキドキしませんか、それだけで。

あと休みの日に気軽に1時間の尺で観れること。成人映画館行って気づいたのは、気楽だってことです。2時間の普通の超大作は真剣に観ないとストーリーがわからない。極端な場合パンフレットの人物関係図を見て覚えてからじゃないとわからない。仕事が休みで楽しみたいのに、普通の映画だとまたしんどくなってしまう。ところが成人映画は1時間という尺で、お金がないから作れないというのもありますけど、すごいわかりやすいんですよ。

加藤：映画を観たときに引き起こされる感情を他のお客さんと共有するのが大切なんですね。

戸野：そうですね、なんかドキドキしますよね。もっと言うならば、そういうお友達とかできればいちばん良いんですけど……。

加藤：実際お友達はできましたか。

戸野：〔映画館へ〕行ったときに、「あ、こないだもいたね」という人はできました。できましたけどやっぱり映画館がなくなると同時にいなくなりました。そういうのができる人って、本町館にしかいませんでしたね。他の映画館は、もう「やる」のが目的だけの人になっちゃうので。

本町館、面白い人いましたよ。「今日な、孫と一緒に食事するからその間時間つぶしてるんや」言うてる人とか。孫もいるということは結婚してるんですよ。でも「もう1人やからいつ死んでもいいんや」と、ってことは奥さんと何かで別れたか、先立たれてるか。上映中に私の隣に座って、ずっと太ももの上に手を置くんですけど、それ以上のことは何もせず。そんなおじいちゃんもいたんです。それはすごい素敵な思い出でした。映画館だけの関係というか、他にもまたご飯食べに行きましようよっていう約束をした人はいるんですけど、結局連絡つかない。けど月に1回とか通っていたらそのうち会えるだろうと思っていました。まさか本町館がなくなるとは思ってないんでね。

石川：成人映画館の魅力について、映画館ではドキドキや恥ずかしさ、怖さがあるとおっしゃいましたが、異性愛の男性の観客が戸野さんの隣に座って例えばチラチラ見てきたり、触ってきたりするのはどう思いますか。嬉しく感じますか。

戸野：はい、正直言うと嬉しいかな。女装好きな男性のお客さんっていうのが一定数いるのと、あと成人映画館に女性のお客さんが来るらしいんですよ。〔私にとって〕一番の理想は、本当の女の人だと思って上映中にナンパされること。実際〔女の人かと思ったと〕言われたことがあります。〔ある人が〕チラチラ〔こちらを〕見て横に座ったけど、何もしてこなかった。「なぜですか、他の人はもっといきなりガーッてくるのに」と聞いたら、「ほんまの女の人にそれやったら捕まるやんか」と言われました。いやあ、カッコいいなと思ひまして。たぶん最高のお世辞やと思うんですけど、本当だったとしてもお世辞だったとしても嬉しい。

女装好きの男性には2パターンあります。本当は女装でも女性でもどっちでもいいっていう人と、本当に女装じゃないと駄目っていう人で、ほとんどはどっちでもいいんですよ。成人映画館に来るような人はそんなにお金持ちじゃないんです。だから難波とか梅田の本当のおねえちゃんとはなかなか遊べない。だけど西成とか新世界だったら偽物のおねえちゃんがすごい安い料金でお店やってますと。だから彼らはそれでもいい。ただ、それでもどっちかって言うたら本当の女の人に似せている方がいいんです。そのパターンで声かけてもらえたら一番嬉しい。

石川：映像の話に戻るんですけど、今AVの視聴のあり方が、配信の場合セックスシーンとかフェラのシーンとか、選べるようになっていきますよね。それこそ戸野さんがちゃんと観たいとおっしゃっていた物語のシーンを全部すつとばして、抜けるところだけが観れるんですよ。戸野さんが経験した映画館での思い出の豊かさはそこにはないなって思います。

戸野：まさしくそれですよ。私もやっぱりついてるんで、どうしてもしたいときあるんですよ。そのときにやっぱり早送りとか、あと総集編ってやつありますよね。そこばかり集めてるやつ。やっぱりビデオとか配信にするととなると、そうなっちゃう。リモコンとかマウスに誘惑されてしまう。

ところが映画館で見ると、それできないんですよ。だからストーリーをみることになる。あと演技力ですね。やっぱりピンク映画は演技力があると思います。

石川：ピンク映画はただ卑猥なだけではなく、フィクションとしての完成度を高めてもいるといたしますか。

戸野：そう、大して見えてないのにすごいドキドキする。人によりますけど正直な話、私ほとんど〔演者が〕服着たままでも、シチュエーションで感情が高ぶれば、それで射精はできます〔一同笑う〕。女性向けAVとかエロ映画でも、やっぱり女性はそっちの方、大事なんじゃないですか。いきなりやっているとこみても駄目なんじゃないの。

加藤：確かに過程が大事かもしれないですね。今回の上映会観客アンケートでは、他の方のアンケート結果も結構面白かったんです。ピンク映画とかロマンポルノを初めて観た人がたくさんいらっしゃったんですけど、なかにはエロい気持ちと、ちゃんと映画として作られていて面白いという気持ちが交互に現れて、そのせめぎ合いにすごく混乱したと書いていた方がいました。また女性の方で、映画のなかでモノ化された女性表象を観ることに自傷行為みたいな快感があると書いていた方もいました。戸野さんはピンク映画を見ているときに物語も重要っておっしゃいますが、どういう気持ちを感じていることが多いですか。

戸野：やっぱりエッチなところに期待はしていますよね。そうじゃなかったら普通の映画を観たらいいわけだし。だけど、映画としてのストーリーがきっちりしているのは、なんか2倍おいしい感じ。普通の映画館で上映しているフランス映画とかイタリア映画もやらしいやつありますよね。そっちに近いのかな。今回の浜野監督の『雌猫義母』は、正しく王道を行っていましたね。一応エロいところもいっぱいあるんだけど、なんかおじいちゃんが偉くて、長男は家を継ぐもんだという昔の家庭に対する反発っていうのがテーマとして描かれている、という痛快な映画。ただもうひとつの『秘色情めす市場』。あれエロシーンなくて普通の映画でいいじゃん。エロにしたのは結局、テレビの普及とか〔が原因〕なのかなと思うんですけど、あれめちゃくちゃ重すぎるじゃないですか。

加藤：そういう意味では浜野監督のピンク映画も男性中心的な家族観をぶっ壊すぞみたいなフェミニズムをテーマにされていて、ピンク映画の主な観客である異性愛男性の方

からしたら嫌なんじゃないかなってというのが私の感想でしたが、そのあたりはどうですかね。

戸野：それはあるんじゃないですか。そこ〔テーマと濡場〕のバランスがね、浜野監督の作品は良かったと思います。確かに人によっては無理だと思います。『~~秘~~色情めす市場』はテーマが多すぎるんですよ。

加藤：戸野さんにはアンケートで千本日活や新世界東映など、様々なピンク映画館のことを書いていただきました。戸野さんは、日本全国の成人映画館に行かれていますか。

戸野：全部は行ってないです。あと行ったのは、新開地福原……、ちょっと松下商会の話をしておくと、もう松下商会だけなんですよ、はっきり言って。関西では千本日活がちょっと特殊で、それ以外の神戸と尼崎と新世界と上本町にある四つの映画館は全部松下商会が経営しています。

私は、上本町以外は全部制覇しました。そのうち新開地福原は、あんまり綺麗じゃないうえに、おじいちゃんが追いかけてきたりとかやっぱり治安は良くないんです。けど、あの広いスペースでイベントをしている女装している方がいるんですよ。今のところハロウィンと、クリスマス前後の土曜日にイベントをしています。具体的には上映中にビンゴ大会をしています。プラスアルファを取らないで普通に映画の料金だけで映画を観て、「今からビンゴ大会するぞ」って言ったら、ビンゴやって、ビンゴ終わった後また映画を観てもいいし景品もらって帰ってもいいしっていう。

あと尼崎パレスってあるんですけど、そこが日劇と並んで比較のおとなしい。だから本町館がなくなってしまった以上、普通に映画が見られてちょっとだけ痴漢がいるところで言うと、日劇と尼崎の2つかな。

上本町はどうも女装さんは駄目らしいんですよ。何か暗黙のルールがあって、上本町はいけません。

加藤：そういったイベントの趣旨は、成人映画とか成人映画館を愛好する人たちの輪を広げるということですか。

戸野：半分合ってて半分違います。成人映画に全く興味がない人も来ています。1600円で映画が観られてさらにビンゴ景品もらえるって言ったら、普通の日よりお得だから、普通に来る人もいるし映画を全然観てない人もいる。映画館に行ったらやっぱり一定数痴漢がいるので、それが嫌だからずっとロビーでビンゴゲームしいてる人もいます。

加藤：アンケートに中村日劇がこれからの成人映画館のひとつの答えなのかなと書かれていたのが印象的でした。戸野さんとしては、成人映画館文化を続けるうえであるべき姿とは、どんなものですか。

戸野：実は私友達に聞いただけで、中村映劇へは行ったことないんですよ。ただ、まず前の席2列に集中席と書かれたシールが貼られていて、映画を集中して観ることができます。その席に座っている人は絶対痴漢されないんですよ。もしされた場合一発アウトですよ。防犯カメラも設置しているっていうお話だし、もうほんまにフロントの人が懐中電灯を持ってガーッと乗り込んでくるらしいですから。だから女性ひとりでも観に行ける。でもそこから後ろの席っていうのは普通の席で、ある程度は〔痴漢を〕認めてる。でも表向きには言えない。でもモロだしは駄目です。

中村映劇はロビーをちょっと広めに取っていて、喋れる場所になっています。あとパウダールームも設置しています。女装の人は、カラオケボックスとかネットカフェで着替えているんです。そういう現状のなか、堂々と着替えられる場所を提供してるといいます。実は松下商会さんも福原と尼崎の成人映画館に設置しているんです。男モードで来て、中で着替えて女の人に変われる。それでまたずっと戻って帰れる。中村映劇はそこがいいのかもな……。

それと中村映劇って恐ろしく営業時間短いんですよ。普通、映画館って平日は18時ぐらいからピークじゃないですか、でも中村映劇は仕事後に行ったら終わっているんです。なおかつ定休日が2日もある。それで経営が持ってるようなので、本町館もそれができたらよかったんだけどな。

あと本町館の分煙されてるところはよかったですね。中村映劇がどうかは分かりませんが、本町館は奥の何かに使っていた倉庫みたいなところが喫煙室になっているんですよ。それ〔分煙〕ができてるのは、本町館と日劇だけだったんですよ。

加藤：つまり、戸野さんの理想の成人映画館とは、女装家でも女性でも非喫煙者でも、だれでも気軽に楽しめる映画館ということですね。ちょっと最初の話に戻るんですけど、ハッテン場に関してはどう思っていますか。

戸野：本当はね、妻帯者なのでそういうところ行っちゃ駄目なんですけどね。〔ハッテン場は〕アリだけど、いちばん怖いのは病気なんです。不衛生なのはもちろんですけど、特に私の場合、嫁さんとか子どもに移すのは絶対にできない。やっぱりそこをちゃんとしているところってなってくると、これね、女装バーの人にはっきり言われたんですけど、お店の値段見ろって言われたんですよ。そこに入るのにいくらかかるかで、お客さんのレベルが大体決まるっていう。公園とかゼロ円だからやめとけって言われました。一方で映画館は入場料がある。

加藤：そろそろまとめの質問に入らせていただきます。先ほどもお話にありましたが、本町館だけではなく国際劇場も閉館していくなかで、今後は成人映画文化にどのようなことを期待しますか。

戸野：どうなんだろう。結局今までね、逃げてばかりいたんですよ。テレビが出てきたから、テレビで放映できない映画だったら生き残れるじゃんって、それって逃げてますよね。ところがイオンシネマとか〔シネコンは〕攻めていったじゃないですか。映画がオワコンになっているのに対して、1つの建物の中にたくさんスクリーンを作ると。暇やからとりあえず来たわって人にも、何か面白そうだと思わせる。あとデートの流れでどっか行くときに、スクリーンが1個しかなかったら、彼女が、そんな見たくない、私ホラー嫌いやねん、って言ったら終わりです。だけどシネコンだったらどれか〔好みに〕ひっかかるじゃないですか。成人映画館も何か攻めるものを持ったらいいと思います。

ひとつ簡単なのは、この間みたいにな上映に加えて人前で何かを喋ってくれるイベントっていうか、トークイベントみたいな。出町座でもよくやっていますよね。やっぱりただフィルムを流すだけっていうのではもう無理だと思います。

成人映画館は、高齢男性が孤立するなかで安価に利用できる憩いの場にもなっていると思います。女性にも来てほしいのもそうだけど、その場を絶やして欲しくない。そういう気持ちがあります……。

加藤・石川：ありがとうございました。



戸野この子氏